展望・解説

第1回流れの可視化学会講習会に参加して*

溝口博志**

At the first Seminar on Flow Visualization

Hiroshi MIZOGUCHI

表記講習会が83年11月15、16日の両日東京で行われ、機器展示・実演・実習が併設会場で行われました。

小社㈱構造計画研究所もお誘いを受け参加しました。小社は土木・建築分野を中心とするエンジニアリング分野向ソフトウェア開発を主な業務としていますが、お誘いを受けどのようなものを展示させていただいたら良いのか悩みました。なにせ流れの可視化学会なるものがあるとも知らなかったのです。結局境界要素法による処理結果の図画処理と、ビルディング周辺の風の流れを解析、図画処理を行うシステムを見ていただくことにしました。

この後者の“ビル風”問題は従来より模型を使って風洞実験によって解析されていたのですが、模型にする時の縮率の問題から限界がありました。

昨年9月に申し込みをし、直前には参加者動員の要請があり、一寸心配もしましたが、当日は驚くほどの来場者があり、機器展示も32社が行っており大変盛会でした。講習会の規模も他の我々が参加している類似のものと同様あるいはそれ以上のものでありましたが、我々企業の立場からみるとまず第一によりアカデミックなふんい気を感じました。次に良い意味でのアマチュアリズムを感じました。前者は講習会場で、後者は受付、展示会場でその感を得ました。

32社(者)の展示にもなったため、展示会場は多少狭いものとなってしまったようです。

ソフトウェアのみを扱っているのは我々のみのようでした。パンフレット、本(コンピュータによる流体力学、ローチェ、上・下・演習の3冊の

翻訳出版を行っています)のうれゆきも大変良く、ビル風問題プログラムに対する質問も沢山いただきました。また講習会終了後、数多くのお客様に私どもの事務所でデモをみていただきました。一時はデモのスケジュール調整に苦勞するほどでした。これらのことから実験を支える形でのコンピュータシミュレーション、その可視化、画像処理に対する必要性、関心、可能性に我々の流体力学研究室、グラフィック研究室のメンバーもその意を強くしています。

講習会参加者が学校関係の方々のみならず、広い範囲にわたる業種の企業の方々であることも一層その意を強くさせてくれます。

懇親会が第1日目の夜行われ、参加させていただきました。最初有料とのことであったものが招待となり、うれしいというか、アマチュアリズムの発露が感じられ、会が運営されている精神にはほえましいものを覚えました。

ビールを楽しみながら隣におられた方と話したことも忘れられないことです。

私どもと多少関係のある建設会社の方でしたが、話がいわゆる建築家のそれではなく広さを感じさせるものでしたので、どのような仕事をなさっている方かと思っていたところ(その方の名札の名前が隠れていたのです)、その方がスピーチを求められ、水泳中のフォームを写真にとられた話とか、イルカの如くなぜ人間が泳げないかといった話とかをされていました。結局その方はオリンピックのゴールドメダリスト・スイマーとわかり、なるほど流れの問題に関係あるわいと感心もし、また可視化学会の幅の広さも感じすっかりうれしくなったものです。最後に会のより一層の発展を祈念し、参加の機会を与えていただいたことを感謝致します。

* 原稿受付 昭和59年2月2日

** ㈱構造計画研究所